
不死鳥は忒度こける

六道 軌跡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死鳥は忒度こける

【Nコード】

N2187Q

【作者名】

六道 軌跡

【あらすじ】

大企業が開発した「セカンド」という、仮想空間を作り出す機器により利用可能なレベルのVR空間を完成させた。ゲーム業界もVR技術を取り入れて行く流れの中で最大の総合製品会社「フログテイアワークス」が総力をもって製作したVRMMOゲームが始動する。数多くの製品を圧倒的な技術力で開発する会社が作り出した古代文明と魔法のファンタジーゲーム。

多くの人間が我先とプレイする中である兄妹がゲームを開始する。今始まる変態兄と変な妹の物語。

妹「さあ、我にゲームを献上するので兄上」
兄「それはできない」

妹「さあ、我にゲームを献上するのです兄上」(前書き)

作者のフェニックスゲームリベンジ作品。

物語は大きく変わってしまいました。

妹「さあ、我にゲームを献上するのです兄上」

「なあ、孝史。人間は何故ゲームをする？」

「楽しいからだろ」

「なら何故、俺はゲームを買いに行かなければならない？」

「どうせ千輪ちゃんに頼まれたんだろ」

「その通りだ！相棒よ」

「はいよ。ところでお前もプレイするのか？」

「興味ない。剣や魔法で闘ったところで俺には似合わん」

「それが生産もできるだけ。料理とかもかなり精巧に行うことができるよか」

「同志よ……」

「どうした？」

「さあ、買いに行こうではないか！」

大企業が開発した「セカンド」という、仮想空間を作り出す機器により利用可能なレベルのVR空間を完成させた現在の世界。

ゲーム業界もVR技術を取り入れて行く流れの中、最大の総合製品会社「フログティアワークス」が総力をもって製作したVRMMOゲームが始動する。数多くの製品を圧倒的な技術力で開発、販売する政府公認の会社。そんな会社が作り出した古代文明と魔法のファンタジーゲーム。いままで他の会社のVRMMOでプレイしていたプレイヤーたちもこのゲームに移動してゲーム市場を独裁するとメディアが報道する。

クロスバル大陸、古代の遺跡や魔法が残るこの世界の基盤とも言える舞台である。北海道の総面積を越えるほどの広大な面積を持つこのゲームの総データ量は、凄まじい量である。

大陸にはいくつかの都市と、多数の村や街、山脈や森林、そして大陸を囲む壮大な海が広がっている。

その一つ一つに細かい設定を施し、プレイヤーを満足させるために工夫しているというのが公式サイトでの開発者の言葉である。

これほどの容量をディスクに収納して販売するのは難しい。そこで開発されたのが「コアドディスク」。

いままで不可能なほどの大型の収納能力と展開速度そして高速読み込みを可能とした手の平サイズの最新品。これもまたフログティアワークスが開発物でその名を世界にまたしても轟かせた。

現在は、正式版が発売して全サーバーでこの日を持ちどおしくたまらなかつた多くの人間が我先とプレイしていることであろう。

そんな中一人の青年が正式版のコアドディスクを2つ所持して部屋の隅で分厚い説明書を読みふけている。

（そうそれがこの自分。本間智^{ほんまさとし}。またの名を変態料理人。そう俺は

料理に情熱を燃やす変態なのだ！)

そこへ一人の少女が学校から帰宅して部屋に入ってくるもちろんな夕方過ぎて訪れるものなどただ一人そう妹様である。

「いま帰ったわ、兄上。どうです献上品は手に入りましたか？」

「当然だ。千輪ちわの分はそのテーブルに置いておいた」

「さすが兄上やればできる！ 褒めてつかわそう！」

ちっこいくせに偉そうである。俺が頑張って行列に並び買ったというのに。妹の千輪は俺が買ってきた製品版のコアドディスクを手で持ち上げてその場でくるくるとダンスでもするように回る。彼女もまたこの日を待ち遠しくてたまらなかったゲームオタクだ。凄まじいゲーム中毒で休みの日は部屋に籠ってゲームが普通なのだ。

千輪ちわと言う名前は千せんの輪わ。友達がたくさんできる明るい子になってほしいという親の思いだ。残念ながらゲームで変な妹に友達など少ないのではと思ったが、本人いわくネット上にたくさんいるという。

「兄上は何やっておられる？」

「見たらわかるだろ。説明書を読んでいるんだ」

俺は妹に分厚い説明書を持ち上げながら見せる。

「なにをそんなもの、いまどき分厚い説明書を全部読む人なんて否定する。せつかくだから一緒に早くやりたまえ」

「あともう少しで読み終わるそれまで待つてくれ。そこに晩飯を作
つて置いたから食べると良い」

俺は説明書に視線を戻しながら、妹が帰ってくる前に作った晩飯を
食べるように伝える。

「仕方ない。頂いてつかわそう」

俺は妹のじゃまが入らなくなったので残りのページを残すところなく
しっかり読む。ものごとには準備が必要だ。料理には下準備が大切
だ。しっかり不要な部分を取り除き、臭みを抜き、下味も入れそし
てやっと料理の本題に入れるというもの。そのどこかを疎かにして
いるようでは、料理は完成しないと思わないか？そうであるう。

もちろんそれはゲームをやる時と同じことが言える。説明書を読み
理解したうえでプレイすることにより楽しさもアップするというも
のだ。まあこれは俺の場合はというものを理解している。妹の場合
はまずプレイしてそれでわからないことを順番に覚えていくそれが
楽しいと語る。

そう物事は人一人皆違う考えを持っている。人の意見も尊重するの
が大切だ。それを気づかないようではだめだ。それが内の家族の教
えである。

「さあ兄上、早く一緒にプレイするのだ！」

晩飯を食べ終えて準備が整ったのだろう妹がせかす。

「よし、仕方ない。やろうではないか」

俺は説明書をたたみ、準備を整える。

ゴーグル型「セカンド」を装着そして二人して起動してゲーム開始する。青白い光が点滅して視界が淡い光が包み込むように意識を奪っていった。

さあ、これから新しい何かが始まる。

さあ、始めよう「フェニックス」というゲームを。

さあ、物語の幕開けだ。シヨウタイムといこうじゃないか！

妹「さあ、我にゲームを献上するのです兄上」(後書き)

妹にこき使われたりとなにかと現実でもありそうなものです・・・

兄「それはできない」

広がる草原、咲き誇る花、生い茂る木々、そして眩しく照らす太陽。

「美しい！ まさしく芸術だ！」

「兄上！ アホ言っていないで早く街にいくのです」

ゲームを起動した俺たちを迎えたのは広がる草原の大地だった。最初に思ったことは美しいそれ一つだ。これほどのものが作りあげられているとはたいしたものだ。俺はあふれんばかりに大地に身体をのりだそうとした。

「身体がない。これいかに」

しかし、前に動くどころか一步も動けない。俺の身体は存在してなかった。

そんな俺のことを無視するようにどこからか機械的な声がする。

「ようこそ。クロスバル大陸へ。システム管理AIのネバです。お会いできて光栄です」

「俺も会いたかったぞ！」

「ここでは、アバターの設定を決めます。」

どうやら俺のことはやはり無視のようだ。

「背の高さから顔など細かな設定が行えます」

「よし、背は高めだ。顔は好きにしてくれ。手は大きめにしておし。彼の有名な料理人は大きかったからな、うむ」

俺はなんども注文をつけながら細かい設定を行っていく。何事も最初が肝心という。

「次に戦闘の職種を選択します。この中から選んでください」

俺は提示された物を覗き見る。端から端まで良く見渡したが俺の探しているものがない。

「料理人はどこにある？」

「料理人は戦闘職ではありません。それに料理スキルはございません。個人の技量に任せたシステムとなっております」

「なんと馬鹿な！それに闘うコックさんだって映画で良くあるだろう。いや、まてまだ早い・・・料理はできるんだな？」

「はい、個人的な現実での技量に任せたものですが個人のお店を持つこともできます」

「ほう。でかしたよしなら問題ない。」

「戦闘の職種をどうされますか？」

「はっは、好きにしたまえ」

料理ができるならあとはなんでも良い。これこそ我が人生だ。

「次にこの世界での名前を決めてください」

「そっだな・・・ボキューズだ」

「申し訳ございませんがその名前は他のプレイヤーが使われているもので利用できません」

「なんと、かの有名な料理人の名前が使われているとは！ この世界も侮れんな」

「どうされますか？」

「じゃあ、ツヴァイだ」

この名前は妹と一緒にプレイした他のゲームの時に俺の代わりに妹がつけた名前だ。

ドイツ語でツヴァイとは2を意味する言葉として使われるもので何故に妹がこういう名前をつけたかはわかりはしないがとっさに頭に浮かんだ名前を俺は伝える。

「その名前も使われております」

「そいつは仕方ない」

「それならこれでどうだ、レジオン」

「利用可能です。レジオンでよろしいですか？」

「ああ、問題ない」

レジオンとは、かの有名な料理人が大統領から頂いたという勲章から名前をとったものだ。しかし何度も名前が被るとはこのゲームをプレイする人は何人ぐらいいるのだろうかと考える。

(うむ、後で調べておこう。)

俺はその後もなんだか細かな設定をさせられてすべて終えた時にはかなりの時間がたったような気がした。

「それではこれで設定を終えます。新しい世界をご堪能ください」
またしても淡い光に包まれる。俺はあふれんばかりの期待を胸に光が視界から消えるまで待ちつつける。

そして俺が次にでた場所は遠くに街がみえるさっきと同じようで少し違う草原の大地だった。

「やっと参上しましたね。兄上遅いのですよ」

「誰だお前は！」

「なにを、千輪に決まっておるではないか」

「なんだその金髪の女性姿は！」

「ふ、私ぐらいになったらこのぐらいが似合うのです」

どうやら変な妹で間違いないようだ。しかし金髪に紅い鎧姿そして現実より整った顔まさしく誰だかわかりはしない。

「そういう兄さんはだっけてきめちゃってるじゃん！」

「何がだ。当然だろ。料理人として必要なことはすべておこなった」

「良く見たら兄上のアバター怖いんだけど。顔とか性格とか」

「そうか、顔は確かおまかせにしたからな」

妹いわくは俺の顔はマフィアの人間みたいだそうだ。しかし妹のとだ映画でしか見たことがないであろうが。

「しかしよく、俺だとわかったな」

「なにをいまさら。始める前にリンクを張ったではないか」

「そうか。そうだったな」

リンクとは一緒に始めた友達どうしが中で出会えるようにあらかじめ正式版のコアディスクに同封された製品コードを入力することでリンクを貼り素早く出会うことができるものである。

「兄上の戦闘職って何かしら」

「俺のは・・・ふ、暗殺者だ」

俺はお任せにしたのを思い出しメニューを開きステータスを確認してそう答えた。

「その顔でその職種はマジ怖いわ犯罪だわ」

「そういつお前はなんだ。やっぱり騎士か？」

「うん。それこそなにをいまさら。まさにぶさわしい！」

「そうか。まあお前らしいな。ところでこの大地は素晴らしい造りだと思わないか？」

「え、まあ、そうね」

広がる草原、咲き誇る花、生い茂る木々、眩しい照らす太陽。

「美しい！ なんとも美しい。まさしくこれぞ芸術だ！」

「兄上！ アホ言っでないで早く街に行くのよ」

兄「それはできない」(後書き)

オンラインゲームをプレイする時になにかと名前がほかの人とかぶって決まらない時ってありますよね。最近オンラインゲームとかやれてないな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2187q/>

不死鳥は式度こける

2011年1月19日04時19分発行